

3-1 徳之島の昆虫類 (1995年8月)

1995年8月8日～11日の4日間、徳之島の昆虫類についてチョウ、トンボ類を中心に調査を行ったのでその結果を報告する。特に新記録種などの新知見は得られなかったが、リュウキュウハグロトンボの水中潜水産卵観察など若干の成果を得ることができた。また、調査に際して伊仙町の義憲和、福実薫の両氏には道案内等で大変お世話になった。この場を借りてお礼申し上げる。

(1) 調査日程

- 8月8日 伊仙町義名山 (IG)
- 8月9日 徳之島町大原 (TO), 天城町三京 (AMI)
- 8月10日 徳之島町山田川 (TY), 天城町松原 (AMA), 徳之島町母間 (TB)
- 8月11日 徳之島町白井 (TS), 伊仙町糸木名 (II)

(2) 調査者 田中 章 (at), 江平憲治 (ke)

(3) 調査結果

今回の調査によって得られた昆虫の記録をまとめる。なお、調査場所、採集(目撃)者は上記の()内の記号で表記するものとする。ただし、採集(目撃)者名のないものは、チョウ目については田中章(at), トンボ目については江平憲治(ke)である。

[チョウ目]

セセリチョウ科

チャバネセセリ

IG, AMA (少数目撃)

アゲハチョウ科

ジャコウアゲハ

各地 (少数目撃)

アオスジアゲハ

各地 (普通に目撃)

シロオビアゲハ

IG, AMI, TY, AMA, TB

TS (少数～普通に目撃)

クロアゲハ

IG (1♂), 各地 (普通～多数目撃)

ナガサキアゲハ

TS (1♀), 各地 (普通～多数目撃)

モンキアゲハ

各地 (普通に目撃)

カラスアゲハ

TO (1♀, ke)

AMI, TB, TS (少数目撃)

シロチョウ科

キチョウ

II (2♂), 各地 (少数～普通に目撃)

ツマグロキチョウ

TB, II (少数目撃)

モンキチョウ

IG (1頭, 他に少数目撃)

AMI, AMA, II (少数目撃)

ウスキシロチョウ

AMI (ムモン型2頭目撃)

TS (ギンモン型1頭目撃), (ギンモン型

1♀, ke)

ツマベニチョウ

各地 (少数～普通に目撃)

モンシロチョウ

IG (1♂, 他にも普通に目撃)

AMI, TB (少数目撃)

AMA (普通に目撃)

シジミチョウ科

イワカワシジミ

AMI, TY (幼虫の食痕あり)

- ウラナミシジミ
IG (1♂, 他にも少数目撃)
- アマミウラナミシジミ
IG, TO (少数目撃)
AMI, TY (普通に目撃)
- ヤマトシジミ
各地 (普通~多数目撃)
- シルビアシジミ
IG (1頭, 他に少数目撃)
II (1♂, 他に多数目撃)
- マダラチョウ科
リュウキュウアサギマダラ
各地 (少数~普通に目撃)
TS (1♂, ke)
- カバマダラ
AMI, AMA (1頭目撃)
- タテハチョウ科
ツマグロヒョウモン
IG (少数目撃), TB (1頭目撃)
- リュウキュウミスジ
IG, TO (普通に目撃)
AMI (1♂, 他に少数目撃)
TB (1頭目撃), TS (少数目撃)
- ルリタテハ
TB (1頭目撃)
- タテハモドキ
AMI, TY, AMA, TB, TS
(少数~普通に目撃)
- イシガケチョウ
IG, TO (少数目撃)
- アカボシゴマダラ
II (1死体採集)
- ジャノメチョウ科
ウスイロコノマチョウ
IG (普通に目撃), AMI (少数目撃)
- 〔トンボ目〕
- イトトンボ科
リュウキュウベニイトトンボ
II (2♂, 義憲和) (1♂, at)
- アオモンイトトンボ
IG (1♂, 他にも少数目撃) (1♂, at),
II (1♂, at)
- モノサシトンボ科
アマミルリモントンボ
AMI (2♂2♀, 他にも産卵中のペアな
ど少数目撃), TY (3♂, 他にも少数目撃)
- カワトンボ科
リュウキュウハグロトンボ
IG (1♂, 他にも少数目撃)
AMI (2♂1♀, 単独潜水産卵観察,
他にも多数目撃) (2♂1♀, at)
TS (1♀, 他にも少数目撃)
II (少数目撃)
- サナエトンボ科
チビサナエ
AMI (未熟成虫1♀)
タイワンウチワヤンマ
IG (1♂, at), TB (数頭目撃)
- ヤンマ科
カトリヤンマ
AMI (未熟成虫1♂)
TY (少数目撃) (1♂, at)
- リュウキュウカトリヤンマ
II (1♂)
- ギンヤンマ
IG, TB, TS, II (少数目撃)
- エゾトンボ科
オオヤマトンボ
II (少数目撃)
- トンボ科
ハラボソトンボ
IG, AMI, TY, AMA, II
(普通に目撃), TY (1♂, at)
- オオシオカラトンボ
IG, TO, AMI, AMA, TB,
TS, II (普通に目撃)
AMI (1♂, at)
- アオビタイトンボ

I I (少数目撃)
 ショウジョウトンボ
 I G, I I (少数目撃)
 ベニトンボ
 I G (未熟成虫 1 ♂), T B (少数目撃)
 I I (1 ♂, a t)
 オキナワチョウトンボ
 A M I, T S (少数目撃)
 ハネビロトンボ
 A M I, A M A, T B, T S, I I
 (少数目撃)
 ウスバキトンボ
 各地 (普通に目撃)
 [カメムシ目]
 ヘリカメムシ科
 ホソハリカメムシ
 I I (2頭, k e)
 セミ科
 リュウキュウアブラゼミ
 I G (羽化殻 1, k e)
 [コウチュウ目]
 タマムシ科
 アオウバタマムシ
 A M A (1 ♀, k e)
 ハンミョウ科
 アマミハンミョウ
 T O (3頭, k e), I I (2頭, k e)
 コハンミョウ
 I G (2頭, k e)
 クワガタムシ科
 リュウキュウノコギリクワガタ
 T O (1 ♀, k e)
 リュウキュウコクワガタ
 T O (2 ♀, k e)
 スジプトヒラタクワガタ
 T O (1 ♀, k e)
 コガネムシ科
 アマミアオドウガネ
 I G (1頭, k e)

リュウキュウツヤハナムグリ
 I G (3頭, k e)
 [ハチ目]
 スズメバチ科
 ヤマトアシナガバチ
 T O (1頭, k e)
 コシブトハナバチ科
 アマミクマバチ
 T Y (1 ♂, k e)

(執筆者 田中 章, 江平 憲治)

3-2 徳之島の昆虫類 (1995年10月)

平成7年度の鹿児島県立博物館による自然調査事業の現地調査(徳之島)を、筆者は10月18-22日に田中章氏のご協力も得ながら実施することができた。この時期は一般昆虫の出現期としてはやや遅い感じがしたが、同定容易なチョウ類、トンボ類、セミ類の生態とくに周年経過や個体数、島内分布あるいは季節的移動などに重点をおいて調査したところ、従来あまり調査されていない時期ということもあって、若干の興味深い記録も得られたのでここに報告する。

本文に入るに先立ち、現地でお世話になった田中章氏および徳之島農業高校の先生方に深謝の意を表したい。またアリの同定をいただいた鹿児島大学理学部の山根正気先生にお礼申し上げる。

(1) 調査日程・コース

10月18日：天城町徳之島空港-伊仙町面縄。一通り自然の概況を見る。

10月19日：午前中、面縄-御前堂-伊仙中部ダム-馬根(ネーマ城跡)-中山-面縄(田中氏同行)。午後、面縄-鹿浦。

10月20日：鹿浦-阿権。海岸付近の樹林と道路脇のコセンダングサの花に来るチョウ類の調査。午後は犬田布岬-天城町秋利神-真瀬名川-湾屋川-平土野-岡前-鹿浦と回ってヤシにつくウラボシセセリの分布調査。

10月21日：面縄-徳之島町亀津-剝岳中腹-NHK放送中継所-天城町三京-馬根(ネーマ城跡)。樹林性昆虫の状況とアサギマダラの調査。(田中氏、古江元気君同行)

10月22日：面縄-徳之島町井之川-母間-東天城中学校-花徳-平土野(田中氏同行)。主にウラボシセセリの調査。

(2) 調査結果

[チョウ類]

頭数や性別を記したものは特に断らない限り採集個体を示す。成虫の汚損度は a (新鮮・完全), b (やや汚損), c (汚損・大破)。

1 オキナワビロードセセリ

鹿浦-阿権, 20日, 2♂(b,c)。この海岸沿いの車道脇にはコセンダングサの群落があり、それに訪花中の成虫が散見された。また周辺には食樹のクロヨナも多く、成葉には蛹の羽化殻が若葉には若齢から終齢までの幼虫がみられた。一方成虫は剝岳のような山地帯でも田中氏が1頭採集している。奄美大島に北限を持つ本種は、海岸付近に新設中の公園などに食樹を植えて保護・増殖をはかりたい種である。

2 チャバネセセリ

伊仙, 19日, 3♂(b,c)。伊仙町の海岸付近から山地(21日, 剝岳)にかけて、コセンダングサなどで吸蜜している個体がかかりいた。次種のイチモンジセセリより個体数はやや多かった。ほかの近似種(ヒメイチモンジセセリ, トガリチャバネセセリ, ユウレイセセリ)が混入していないかと注意していたが発見できなかった。

3 イチモンジセセリ

19-20日には伊仙町の低地・低山地に少数を認めたが、21日の剝岳-三京では見かけなかった。水田がほとんどなくなって個体数が減ったのだろうか?

4 クロボシセセリ

南西諸島を北上する気配を見せているチョウ。八重山諸島では1973年、宮古島では1975年、沖

縄本島では1977年がそれぞれの初記録でその後各島に定着している。徳之島では1985年に亀津で幼虫が、1986年に天城町岡前で成虫が採集されており、この頃から定着を続けていると思われる。徳之島が現時点での北限であるが、本種の北上・分散は食樹ヤシ類の植栽による人為的なものと見られている。

今回の調査では、本種がどの程度の範囲に、どの程度の個体数で生息しているか課題のひとつであった。結果としては、20日に天城町浅間―天城間の湾屋川左岸にあるカラオケボックスの裏庭で3頭の終齢幼虫を採集しただけであった。これらは11月14日2♂、20日に1♀が羽化した。食樹は植栽されたシンノウヤシ *Phenix robelenii*。発見できなかった地域は、19日天城―浅間の街路樹(並木)となっているトックリヤシモドキ、天城、浅間、岡前の車道周辺や人家に植えてある各種のヤシ類(シンノウヤシ、アレカヤシ、トックリヤシモドキなど)、秋利神川の河口周辺のヤシ類(前記のほかピロウなど)、伊仙、面縄の県農業試験場内のヤシ類(前記のほかコモチクジャクヤシ、マニラヤシなど)、25日は田中章氏と面縄、井之川中学校、母間、東天城中学校(ピロウ13本など)、花徳(ホテルトンバラ:アレカヤシ5本)、平土野を調査。各地にヤシ類はかなり多いのに、このチョウはあまり個体数を増やしてはいないようである。何が障壁になっているのか興味深い。ヤシ類の害虫としてはタイワンカブトムシの方が深刻であった。

5 クロセセリ

21日、剝岳中腹―NHK中継所、3頭目撃。アオノクマタケランを食草としていると思われたが、幼虫の発見は出来なかった。

6 アオスジアゲハ

海岸付近から山地まで広く見られたが、発生期の終末に近いいためか個体数は少なかった。

7 クロアゲハ

19日、馬根で少数を目撃したのみ。この島にはあまり多くないらしいがその原因は不明。

8 ナガサキアゲハ

低地の人家周辺から山地帯まで広く見られる。食樹が栽培ミカン類だけと思われるのに、山地の樹林地帯まで成虫が侵入しているのは、人家の存在もさることながら本種の行動圏の広さを思わせる。

9 モンキアゲハ

この時期のアゲハ類では最も数が多く、広く生息していた。

10 カラスアゲハ

20日に鹿浦―阿権で1♀を目撃したのみ。季節によってはもっと多い種である。

11 キチョウ

19日、伊仙、1♂(b); 20日、鹿浦、1♂2♀(a,b)。低地のコセンダングサなどにはかなりの個体数がみられたが、山地には少なかった。

12 ウスキシロチョウ

19日、伊仙、ギンモン型1♂(a)。時期のせいかなり多くはなかったが、伊仙町の低地一帯に広く生息しているようであった。

13 ツマベニチョウ

伊仙町馬根のネーマ城跡付近には食樹のギョボクが多く、成虫、卵、各齢幼虫が多数見られた。剝岳や三京などの山地にも少数の成虫がいた。

14 ムラサキシジミ

21日、馬根（ネーマ城跡）の樹林にはアマミアラカシに産卵する成虫や、卵、幼虫がかなりいた。持ち帰った幼虫からは11月11日に1♂1♀羽化、また10月11日、14日に寄生蠅（未同定）がそれぞれ1頭ずつ羽化した。なお、幼虫に来ていたアリはアシジロヒラフシアリ *Technomyrmex albipes* であった。近似種のラマムラサキシジミは発見できなかった。

15 ウラナミシジミ

19日、鹿浦－阿権のコセンダングサの花にかなりの成虫がきていた。

16 アマミウラナミシジミ

伊仙町の海岸付近樹林で少数を見かけた。

17 ヤマトシジミ

伊仙町の海岸から低山地、NHK中継所のような山頂部（alt. 400m）にまで生息している。どこでも食草カタバミを利用しているらしい。

18 シルビアシジミ

20日、犬田布岬のヤハズソウ群落にかなりの個体が見られた。昔（1959年春）面縄海岸ではコメツブウマゴヤシ群落に結びついていたので気になっていたが、海岸が様変わりしていて今回は調査出来なかった。

19 ウラギンシジミ

20日、鹿浦－阿権のクロヨナの花房から終齢幼虫（2頭）や卵殻を採集した。幼虫は1頭は死に、残りが11月4～6日に羽化（♂）。幼虫にはムラサキシジミと同じくアシジロヒラフシアリが多数来ていた。成虫の斑紋は奄美大島産と同じようである。田中章氏は19日、21日に馬根（ネーマ城跡）で少数を目撃している。本種は従来1975年7月22日に鹿浦で1♀という記録（久保, 1976）しかなく、定着が疑問視されることもあったが（三橋, 1995）、時期や食草の状況によっては必ずしも少なくない種と思われる。

20 テングチョウ

21日、剝岳中腹、1♀(c)。食樹クワノハエノキの新芽が伸びる頃には個体数が多いが、10月というのは成虫の休眠性からすれば面白い記録。

21 アサギマダラ

19日、鹿浦のコセンダングサで1頭目撃（マークなし）。21日、三京－剝岳中腹－NHK中継所、1♂1♀（古江元気採集）。21日、三京で1♂採集（前翅長47mm、かすれ個体）－夕方（16:10）マーク（トクノシマ 1 F）して面縄で放す。21日、馬根（ネーマ城跡）、1♀サクラランに産卵中（？）目撃。

時期的にはちょうど本種の秋の渡り（南下）のシーズンにあたり、その調査を予定していたが、意外にも個体数は少なく期待はずれに終わった。上記のとおり、低地のコセンダングサにも1頭しか来ておらず、山地にはヒヨドリバナ類を見かけず、ツワブキは未開花、アゲラタムが散見されたが、アサギマダラはかすれた個体が樹林内外に少数いたのみ。島の北部は回らなかったが、島の南半分には標高に関わらず訪花植物もチョウも少ないものであった。原因はよく分からないが、吸蜜源の少なさか、飛行ルートをはずれているためか。

22 リュウキュウアサギマダラ

伊仙町の海岸付近（コセンダングサで吸蜜）から山地にかけて普通にみられた。

23 リュウキュウミスジ

調査したほぼ全域で少数～普通という感じであった。

24 ルリタテハ

19日、馬根で少数、21日、三京でそれらしい個体を1頭目撃。

25 ヒメアカタテハ

20日、鹿浦－阿権で1頭目撃。

26 アカタテハ

剝岳などの山地帯を除き、低地帯には少数～普通。

27 リュウキュウムラサキ

19日、馬根で1♀目撃(田中章)、20日、阿権で1♂占有行動中目撃。

28 イシガケチョウ

20日、鹿浦－阿権で少数目撃。

29 アカボシゴマダラ

19日、馬根(ネーマ城跡)、少数目撃。食樹のクワノハエノキは以前に伊仙町の和瀬勝で多数見たが、今回鹿浦～阿権、馬根など注意して探すとかなり多いことを知った。このチョウも広く生息しているものであろう。ちなみに本種は日本では奄美大島と徳之島のみに産する貴重種であるから、公園や校庭などに食樹を植えるなどして保護・増殖を図りたいものである。

30 リュウキュウヒメジャノメ

低地から山地まで少数の成虫が見られた。

[セミ類]

1 クロイワツクツク

19日、御前堂、馬根、中山、面縄；20日、鹿浦－阿権；21日、剝岳－三京、馬根などで普通種。ほとんどの樹林で鳴き声が聞かれた。

2 オオシマゼミ

前種とのすみ分け(鳴き分け?)を期待していたが、20日の鹿浦－阿権で聞かなかっただけで、ほとんど同じ樹林で同時に鳴いていた。個体数は前種よりやや少ないか同程度であろう。今後は樹種を含めた細かな調査が必要である。

3 リュウキュウアブラゼミ

本種も前2種と同じ樹林でかなりの個体が鳴いていた。海岸近くの鹿浦－阿権でやや少ない。

[トンボ類]

1 アオモンイトトンボ

19日、御前堂、2♂採、普通。

6 ベニトンボ

19日、御前堂、1♂1♀採、普通。

2 リュウキュウハグロトンボ

21日、三京、1♂採、普通。

7 ウスバキトンボ

19日、御前堂、普通。21日、三京および馬根、普通。

3 ギンヤンマ

19日、御前堂、少数。

8 オキナワチョウトンボ

19日、御前堂、少数。21日、三京、少数。

4 オオシオカラトンボ

21日、三京、交尾中の1ペア目撃。

5 ハラボソトンボ

19日、御前堂、少数。

(執筆者 福田 晴夫)

3-3 徳之島の昆虫類 (1995年4月~10月の夜間灯火採集記録)

徳之島の昆虫類について採集しているが、今回、伊仙町面縄にある県職員公舎で夜間、電灯に飛来した(一部はブラックライト)昆虫のうち、同定の済んだものを発表する。採集は全て1995年であるので年号は省略した。同定はサンケイ化学K.Kの竹村薫氏にお願いした。ここに厚く御礼申し上げる。

昆虫採集目録

I トンボ目

トンボ科

アメイロトンボ

(IV. 18, 1頭)

II バッタ目

コオロギ科

ツヅレサセコオロギ

(VII. 8, 1頭), (VIII. 2, 1頭)

(VIII. 25, 2頭)

クサヒバリ科

クサヒバリ

(VII. 8, 2頭)

ヤマトヒバリ

(VII. 7, 4頭), (VIII. 1, 1頭)

スズムシ科

マダラスズ

(VIII. 2, 1頭)

ヒシバツタ科

ハネナガヒシバツタ

(VII. 30, 1頭)

III ハサミムシ目

ハサミムシ科

チビハサミムシ

(VII. 12, 1頭)

オオハサミムシ

(X. 14, 1頭), (X. 17, 1頭)

IV ゴキブリ目

オガサワラゴキブリ科

オガサワラゴキブリ

(VII. 8, 1頭)

チャバネゴキブリ科

ヒメチャバネゴキブリ

(V. 21, 1頭)

V シロアリ目

オオシロアリ科

オオシロアリ

(VI. 2, 9頭), (VI. 17, 1頭)

(VI. 28, 12頭)

V.30とV.28~29に電灯に多数飛来した。

VI カメムシ目

ヒシウンカ科

セウスヒシウンカ

(V. 10, 3頭)

ウンカ科

トビイロウンカ

(VI. 16, 5頭)

セジロウンカ

(VI. 16, 19頭)

コガシラアワフキ科

コガシラアワフキ

(IV. 4, 1頭)

ヨコバイ科

シロミヤクイチモンジヨコバイ

(VI. 17, 2頭)

メクラカメムシ科

ナカグロメクラカメムシ

(VI. 4, 1頭)

マダラメクラカメムシ

(V. 30, 1頭)

マキバサシガメ科

マキバサシガメ

(V. 10, 1頭), (VI. 16, 1頭)

(VI. 28, 1頭), (VII. 5, 1頭)
サシガメ科
トビイロサシガメ
(VIII. 2, 1頭)
ナガカメムシ科
オオモンシロナガカメムシ
(V. 29, 1頭)
カンシャコバネナガカメムシ
(VI. 17, 3頭)
チャモンナガカメムシ
(VIII. 1, 3頭), (VIII. 2, 6頭)
ホソナガカメムシ
(VII. 7, 1頭)
フタモンチャイロナガカメムシ
(V. 10, 1頭), (VI. 16, 1頭)
(VII. 8, 3頭), (VII. 12, 4頭)
(VIII. 2, 4頭)
オオホシカメムシ科
オオホシカメムシ
(V. 10, 1頭), (V. 17, 1頭)
(V. 29, 4頭), (V. 30, 3頭)
(VI. 2, 1頭), (VI. 16, 3頭)
(VI. 22, 1頭), (VII. 2, 1頭)
(VII. 7, 3頭), (VII. 12, 5頭)
(VII. 30, 1頭), (VIII. 1, 3頭)
(VIII. 2, 3頭)
ヒメホシカメムシ
(VIII. 1, 2頭), (VIII. 2, 1頭)
ホソヘリカメムシ科
ホソヘリカメムシ
(VI. 16, 1頭), (VI. 22, 2頭)
(VII. 2, 1頭), (VII. 7, 1頭)
ヘリカメムシ科
クモヘリカメムシ
(V. 10, 2頭), (VII. 8, 1頭)
アズキヘリカメムシ
(VII. 30, 1頭)
ハリカメムシ
(VIII. 1, 1頭)

ツチカメムシ科
ツチカメムシ
(VII. 30, 6頭), (VIII. 1, 3頭)
(VIII. 2, 15頭), (X. 19, 1頭)
ヒメツチカメムシ
(VII. 5, 2頭), (VII. 7, 6頭)
(VII. 12, 5頭)
マルツチカメムシ
(V. 30, 1頭)
カメムシ科
イチモンジカメムシ
(VI. 16, 1頭), (VII. 8, 1頭)
(VII. 12, 3頭), (VIII. 1, 1頭)
シラホシカメムシ
(VII. 5, 1頭)
チャバネアオカメムシ
(V. 29, 1頭), (VI. 4, 1頭)
(VI. 17, 1頭), (VI. 22, 1頭)
(VII. 8, 2頭), (VII. 12, 1頭)
(VIII. 2, 2頭)
ミナミアオカメムシ
(VII. 30, 2頭), (VIII. 2, 12頭)
VII アミメカゲロウ目
クサカゲロウ科
アカスジクサカゲロウ
(VI. 2, 1頭)
ウスバカゲロウ科
ヒメウスバカゲロウ
(VII. 5, 1頭)
コナカゲロウ科
キバラコナカゲロウ
(VIII. 1, 1頭)
VIII コウチュウ目
オサムシ科
アトモンアオゴミムシ
(VI. 17, 1頭), (VII. 8, 1頭)
アトモンコミズギワゴミムシ
(VI. 16, 5頭)
アオヘリホソゴミムシ

(VII. 7, 1頭)
オオアオモリヒラタゴミムシ
(V. 13, 1頭), (V. 21, 1頭)
(V. 29, 1頭), (VI. 16, 12頭)
オオヒラタアトキリゴミムシ
(V. 21, 1頭)
キベリゴモクムシ
(V. 10, 1頭), (VII. 5, 1頭)
クビアカモリヒラタゴミムシ
(V. 21, 2頭), (VI. 4, 1頭)
ナガモリヒラタゴミムシ
(VI. 16, 1頭)
ホソアオヘリホソゴミムシ
(V. 10, 1頭); (VII. 12, 1頭)
ミナミゴモクムシ
(V. 13, 1頭), (V. 21, 1頭)
(VI. 2, 1頭)
シデムシ科
オオモモブトシデムシ
(VI. 28, 1頭)
ハネカクシ科
アオバアリガタハネカクシ
(V. 10, 3頭), (VI. 4, 1頭)
シリブトヨツメハネカクシ
(VII. 10, 1頭)
クワガタムシ科
リュウキュウノコギリクワガタ
(VI. 30, 1頭), (VIII. 1, 1頭)
コガネムシ科
オオシマドウガネ
(VII. 30, 3頭), (VIII. 1, 2頭)
(VIII. 2, 6頭), (VIII. 25, 3頭)
(IX. 23, 4頭), (IX. 26, 1頭)
オキナワスジコガネ
(VI. 18, 2頭)
サンカクスジコガネ
(V. 29, 4頭), (VI. 2, 3頭)
(VI. 10, 1頭), (VI. 18, 1頭)
(VI. 22, 1頭), (VII. 5, 4頭)

ヒメカンショコガネ
(VI. 16, 1頭)
フチトリアツバコガネ
(VI. 18, 1頭)
リュウキュウツヤハナムグリ
(VIII. 2, 1頭)
リュウキュウドウガネ
(V. 30, 2頭), (VI. 18, 3頭)
(VI. 22, 2頭), (VII. 5, 6頭)
コメツキムシ科
アカアシクロコメツキムシ
(V. 17, 1頭)
オオナガコメツキムシ
(VI. 20, 1頭)
フタモンウバタマコメツキムシ
(VII. 5, 1頭)
ホタル科
オキナワマドボタル
(V. 8, 1頭)
ナガシンクイムシ科
オオナガシンクイムシ
(VII. 5, 2頭), (VII. 9, 1頭)
(VII. 12, 4頭)
ケシキスイ科
アカマダラケシキスイ
(V. 17, 4頭)
ホソヒラタムシ科
モンセマルホソヒラタムシ
(V. 10, 1頭)
テントウムシ科
クリサキテントウムシ
(V. 10, 2頭)
カミキリモドキ科
ハイイロカミキリモドキ
(V. 29, 1頭)
フタイロカミキリモドキ
(VI. 4, 2頭), (VII. 8, 2頭)
(VIII. 2, 1頭)
ゴミムシダマシ科

コヒラスナゴミムシダマシ

(V. 8, 1頭), (VI. 2, 7頭)

(VI. 4, 1頭), (VI. 21, 1頭)

(VII. 1, 24頭), (VII. 8, 2頭)

(X. 19, 1頭)

ヤエヤマオオスナゴミムシダマシ

(VII. 8, 1頭)

カミキリムシ科

アマミトビイロカミキリ

(V. 13, 1頭)

ヒゲナガヒメカミキリ

(VII. 8, 1頭)

ムツボシシロカミキリ

(VII. 1, 1頭)

ヨコヤマヒメカミキリ

(VI. 4, 1頭)

ハムシ科

ウリハムシ

(VII. 5, 1頭)

ゾウムシ科

シロアナアキゾウムシ

(V. 10, 1頭), (V. 30, 1頭)

(VI. 16, 1頭), (VII. 8, 1頭)

ヒラヤマナガメゾウムシ

(VII. 5, 1頭)

IX ハエ目

ミズアブ科

アメリカミズアブ

(VII. 1, 1頭), (VIII. 2, 1頭)

X ハチ目

アリ科

メクラナガアリ

(VII. 10, 1頭)

(執筆 田中 章)

4 徳之島の哺乳類

(1) はじめに

徳之島は奄美大島の南西に位置し、周囲約84km、面積約 248km²で奄美諸島では2番目に大きな島である。島の北部には天城岳(533m)、中央部から南部にかけて井之川岳(645m)を主峰とする山岳が南北に走っている。

基盤地質は古生層であるが、南部の伊仙町周辺では隆起珊瑚礁(琉球石灰岩)が発達しているため、鍾乳洞も多数見られる。その一つヨヲキ洞穴からは縄文時代の土器と一緒に、イノシシ *Sus Scrofa* やアマミノクロウサギ *Pentalagus furnessi* , ネズミ類 *Rattus sp* などの獣骨が出土している。(松元, 1986)

また小島西方の崖ではアマミノクロウサギ、ケナガネズミ *Diplothrix legata* , アマミトゲネズミ *Tokudaia osimensis* の化石が見つかっている。(富田・大塚ほか 1990)

遺存種とよばれるこのような動物がなぜ奄美大島、徳之島にいるのか、今泉吉典博士は次のように説明している。

今から約350万年前、南西諸島や奄美諸島、沖縄諸島が大陸と陸つづきだったころ南方からイノシシやケナガネズミやシカの仲間がはいり、北の方からはトゲネズミがはいってきた。

アマミノクロウサギはユーラシア大陸や九州など北の方から奄美大島と徳之島にはいつてきたが、そのころは奄美諸島から沖縄諸島が離れたあとであった。(約230万年前)

ところが、北アメリカにあらわれたノウサギ属が約200万年まえにアジアにわたってきて、大陸のアマミノクロウサギをほろぼした。しかしノウサギ属が奄美諸島に入る前に大陸から離れたのでアマミノクロウサギは大島と徳之島だけに生き残った。(約170万年前) (今泉, 1993)

(2) 調査時期と主な調査場所

| | | |
|------|-----------------|---|
| 一次調査 | : 1995年8月8日~12日 | 伊仙町赤田池, ヨヲキ洞穴周辺, 井之川岳, 天城町山田川流域, 犬田布岳, 天城町三京 |
| 二次調査 | : 1995年12月4日~6日 | 井之川岳, 三京周辺 |

(3) 調査方法

「歩いて 眺めて 考えて」は小野木三郎の著書名であるが、実際に山野を歩きながら動物の足跡や糞や巣穴といったフィールドサインを探す方法で踏査を行った。

(4) 調査結果(動物種ごとに述べる。)

○ アマミノクロウサギ *Pentalagus furnessi* (特別天然記念物)

アマミノクロウサギはもっとも原始的な古いタイプのウサギで「生きた化石」といわれている。頭胴長が40~50cm, 耳は約5cmと他のウサギ類に比べて短く、後足も短く急斜面を上り下りするのに適応している。夜行性で昼間は巣穴に入って出てこないが夜になると活動を開始し「ピューッ, ピューッ」と少しかすれたような甲高い声で鳴きかわす。

アマミノクロウサギを飼育した感想では性格はおとなしく、ノウサギとくらべて妄動することもなく環境にも順応しやすい動物である。(酒匂)

調査1日目(8月8日) 調査地:伊仙町

伊仙町は琉球石灰岩の発達により鍾乳洞や遺跡が多く見られ、それらの遺跡からはいろいろな獣骨が出土している。とくにヨヲキ洞穴と伊仙町西部の犬田布貝塚からはアマミノクロウサギの骨が出土している。(松元, 1986) が今回伊仙町中部の赤田池, ヨヲキ洞穴周辺を踏査したところではアマミノクロウサギは生息していないようであった。

2日目(8月9日) 調査地:井之川岳周辺

テレビ局中継所(テレビ塔)から井之川岳頂上に向かって稜線を中心に左右の斜面を踏査したが, 岩の上に1週間以上前の古い糞塊(18粒)が1か所あったほか, アマミノクロウサギの通り道が縦横に走っており比較的新しい足跡や食痕(ヒイラギズイナ, リュウビンタイ, モロコシソウなど)が見られた。

3日目(8月10日) 調査地:天城岳周辺

天城岳の北部, 手々集落西方の山田川流域(約500m)を探查した。ここは10年程前には, 多くの糞が見られた所(義, 1985)なので期待したが, 古い巣穴が一か所見つかっただけで, 糞はもちろん足跡さえも見られず失望した。

4日目(8月11日) 調査地:犬田布岳・井之川岳

ウワナル川中流付近から犬田布岳頂までの稜線(天城町と伊仙町の境界)を踏査したが手掛かりは全くなかった。

夕方, 井之川岳のテレビ塔下の舗装道路上で, 大量の糞が見つかった。糞は長さ約100mにわたって路肩部分に細長く点在していた。(写真-1)

新旧いろいろと鮮度の異なる糞がみられたが, 1~2日以内のものと思われる新しい糞塊が6カ所もあった。(写真-1で白い紙を置いた部分)

新しい糞はそれぞれ24粒, 26粒, 44粒, 48粒54粒(写真-2), 58粒であった。

これらは, 1粒の大きさや色, 糞の質や排泄場所が少しずつずれていることなどから単独というのではなく, 4~5頭のものではないかと思われた。



写真-1 アマミノクロウサギの糞

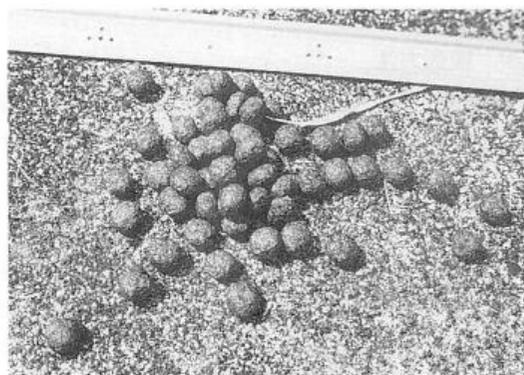


写真-2 新鮮な糞塊

何を食べているか食痕を調べたところ, ホソバワダン(ニガナ)やアキノノゲシを好食しているほか, キンギンソウ, ススキ, キツネノヒマゴ等を食べていた。(写真-3)

最終日（8月12日） 調査地：テレビ塔下

調査時間は午前中と限られていたのでテレビ塔下を重点的に調査した。

昨日の場所に、新たに排泄された糞がないかと期待したが、残念ながら新しい糞は見つからなかった。これは前日、山中のウサギ道を踏査したことで、警戒されたものと思われる。

この場所から数百m下ったNHK 中継所付近の少し開けた場所にもまとまった糞が見られた。

（写真-4）

ここのアマミノクロウサギは東側斜面から上がってきており、数的には上方より少なく3～4頭のものではないかと思った。



写真-3 ホソバワダンの食痕



写真-4 糞塊があった開けた場所

〔二次調査〕

二次調査は12月4日～6日まで3日間行ったが、夏の状態と比較するためにテレビ塔下周辺を重点的に踏査した。

夏に比べて糞塊は大変少なかった。糞塊が少ないのは子育てのためウサギが分散しているためか、あるいは食草の少ないこの時期には自分の糞を食べることが多いのかもしれない。

筆者は飼育下のアマミノクロウサギが軟糞を食べるほか普通の糞も食べ、50～80粒位はたちまち噛まずに飲み込んでしまったのを観察したことがある。

食草は相変わらずホソバワダンを好食していたが、新たにツルソバがメニューに入っていた。

飼育下では好食するイヌビワに食痕がみられなかったことは不思議であった。

夏には気づかなかったが、古い糞塊の上に「ネンジュモ」の一種がキクラゲみたいに密生していた。

（写真-5）

これは、ヤギなどポロポロとした草食動物の古い糞にも生え、特に水分の多いところを好むといわれている。

「ネンジュモ」はアマミノクロウサギの糞を探す目安になるかもしれないと思われた。

実際にその後、子ウサギの糞塊を発見するきっかけとなったものである。（後述）



写真-5 ネンジュモ

【ウサギの木登り】

アマミノクロウサギも少々の傾斜なら木に登るといわれているが、山中を調査中に大きな木の股に糞塊があった。(写真-6)

木は山の斜面に約30度谷側に傾斜していた。

木の股は根本から約2 mのところであり、そこに20数粒の糞塊があった。

アマミノクロウサギは眺めの良い高いところで用足するのが好きなようである。



写真-6 木の股の糞塊

【二つの巣穴】

山中で巣穴が2カ所見つかった。一つ目の巣穴は岩の割れ目から地下に入っており、約1 m底では横穴になっていた。(写真-7)

この穴の中から「ゴトゴトッ」というアマミノクロウサギが地面を叩く足音が聞こえて来た。

これで、少なくとも1頭いることは確実であった。

この巣穴を仮にA穴と呼ぶことにする。

二つ目の巣穴はA穴からおよそ100m離れた斜面であった。ここは岩のすき間から大木の根っここの下に入っている穴で、巣穴の状況から今でも使用しているものと思われた。これを仮にB穴と呼ぶ。



写真-7 真上から見たA穴

【繁殖穴】

この時期は子育ての最中かあるいはもう子別れをすませたものもいると思われる。

繁殖の証となるものを特に注意してさがしたところ、A穴から約30~40m地点に、4~5 mの範囲に新しい土が小高く盛られたような場所があった。

その中腹に最近、繁殖に使われたと思われる穴があった。(写真-8)

入口は縦が15cm、横幅が11cmで奥は約1 m位先は左に曲がっていた。しっかりとした穴の状態から、今年の春に使った繁殖穴ではないかと思われた。

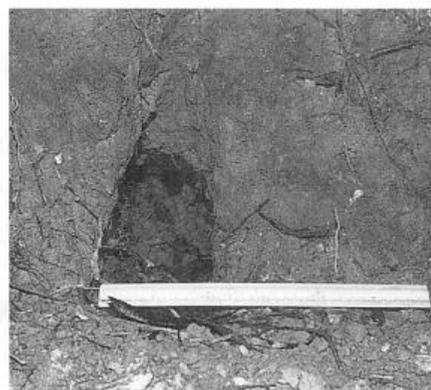


写真-8 繁殖穴(古い)

この繁殖穴から約18mしか離れていないところに現在子育て中と思われる繁殖穴があった。

入口は直径15cmのほぼ丸い形をした穴で落ち葉がいっぱい詰まっていた。(写真-9)

細い棒で約50cm位まで落ち葉を掻き出したがまだ奥があり、また奥にも新しい落ち葉が密に

詰まっていたので、これは風などによる偶然ではなくアマミノクロウサギが意識的に詰め込んだものと思われた。(写真-10)



写真-9 落ち葉で詰った繁殖穴



写真-10 繁殖穴の入口

また、繁殖穴の中に子供がいると思われたので、それ以上詮索せず落ち葉を元通りに埋め戻した。

アマミノクロウサギは後足で土を蹴り込むかたちで繁殖穴を塞ぐのが普通であるが(酒匂, 1991), ここのように土が少ないか硬いところでは落ち葉などを使用していることが分かった。なおこの場合、落ち葉は口にくわえて運び込むのではないかと思われる。

【子ウサギの糞】

12月5日の午後は三京を調査した。

15時ごろ45作業道(幅3.6m)で前述した「ネンジュモ」が見つかったので、その下を調べたところ、古い糞塊を多数発見した。

さらに、丹念に探したところ、「ネンジュモ」から約2mぐらい離れたところに2種類の小さな粒の糞塊を発見した。(写真-11)

2種類とも比較的に新しい糞で、一つは直径4~9mmの大きさでやや扁平なものが19粒あった。

一つは前者より小さく大小ふぞろいではあるが、42粒であった。

これらは2頭分の糞なのか、それとも同一個体の日令による差なのか判断がむづかしいが、いずれにしても生後1か月~2か月ぐらいの子ウサギの糞と推定した。



写真-11 子ウサギの糞

【鳴き声】

夜間の様子を知りたくてテレビ塔周辺にかけた。

12月の4日の夜は10時15分から11時15分まで約1時間、アマミノクロウサギの出るのを待ったが、午後10時24分に1回だけ、山中からアマミノクロウサギ独特の甲高い鳴き声が聞こえた。

翌日の夜も同じ場所で8時30分から11時まで観察したが、9時3分と9時45分、10時の3回鳴き声を聞いた。

しかし、単独行動だったのか鳴き声は単発的で数頭で鳴きかわすという声ではなかった。

〔アマミノクロウサギの将来〕

今回の調査でアマミノクロウサギの繁殖が確認されたことは収穫であった。

しかし、徳之島は面積が狭いうえ農地開発が今も盛んに行われているので生息域はじわじわとせばめられている。

このような環境ではせっかく生まれた子ウサギも生き残るのは至難のことと思われる。

本種はなわばり性が強く、しかも寿命が10年を超えるものもいる（飼育下で12年以上生きた例がある。）ということを見ると毎年春と秋の2回繁殖するとしても子が成長して親になる可能性はかなり低いと思われる。

また、12月5日の山中でアマミノクロウサギの古い巣穴のそばにノイヌのものと思われる糞が落ちていた。（糞の大きさは約10cmで鮮度は新しく黒光りをしていた。）

アマミノクロウサギの将来を案じるものにとっては不気味な糞であった。

それから吉見誠朗氏は8年前の秋、テレビ塔下の道路で妊娠していたアマミノクロウサギがハブにかまれて死亡しているのを発見している。ハブの影響も無視できないと思われる。

徳之島のアマミノクロウサギの生息数については500頭内外という厳しい見方がされていた。

しかし、最近の報告によると天城岳のある北部で123頭、井之川岳のある南部では84頭（杉村・佐藤・山田、1995）とさらに厳しい状況となっている。

徳之島全体で200頭そこそこという数は絶滅の危機をはらんでいるといえよう。

○ ケナガネズミ *Diplothrix legata* (天然記念物)

ケナガネズミは奄美大島、徳之島、沖縄島にだけ生息する日本一大きな野ネズミである。

夏の調査では井之川岳テレビ塔下の路上で糞が数個みつかったほか、オキナワウラジロガシやリュウキュウマツの実に食痕がみられた。

冬は夏に比べてかなり多くの糞がみられた。（テレビ塔下の道路）

糞の内容物は植物性のものが多く、ルリミノキのルリ色に熟した果皮もみられた。

なお、勝氏は1994年、奄美大島の雨の林道で車のヘッドライトに飛んできた虫（蛾?）を前足で素早くつかみ取り食べたのを目撃している。

〔事故死した個体〕

11月14日夜、伊仙町中山で事故死した雄個体が義のもとに届けられた。（写真-12）

計測値は次のとおり

体重 711 g, 頭胴長 27cm, 尾長 34cm (白い部分 16cm), 後肢長 5.5cm (爪まで 6.4cm)。

体毛は3～4 cmの剛毛に覆われ、背中には7 cmの細長い毛がまばらに生えていた。

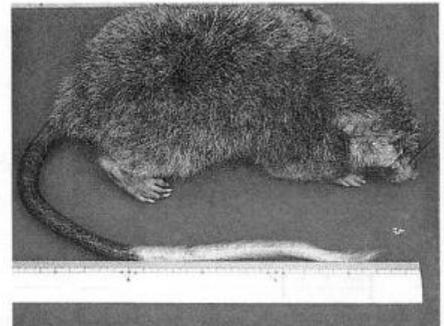


写真-12 事故死したケナガネズミ(♂)

参考までに伊仙町歴史民族資料館所蔵の剥製4例についても、性別、全長（頭胴長－尾長）産地の順で計測値を記す。

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| ① 雄. 64cm (32-32) 犬田布, | ② 雌. 64cm (34-30) 犬田布 |
| ③ 雌. 60cm (29-31) 伊仙町馬根, | ④ 不明. 53cm (28-25) 伊仙町中山 |

○ アマミトゲネズミ *Tokudaia osimensis osimensis* (天然記念物)

奄美大島、徳之島に生息する森林性のネズミで名のとおりトゲ状の体毛を持つ。

餌はシイの実や昆虫を食べるといわれるが、トゲネズミに齧らたと思われる中央部が欠損したオオヤマタニシの殻も散見された。

山中いたるところに直径3～4cmの巣穴がみられた。(写真-13)

夜行性であるため昼間はほとんど見かけなかったが、8月11日午前10時ごろ、三京の林道をすばやく横切る姿を一瞬ではあったが見ることができた。



写真-13 トゲネズミの巣穴

○ リュウキュウイノシシ *Sus riukiuanus* Kuroda (地域個体群)

リュウキュウイノシシは奄美大島、徳之島、沖縄島、西表島、石垣島などに生息する小型のイノシシである。(写真-14)

今回調査した各地で、足跡や土耕跡などフィールドサインがみられたことから広く分布していると思われる。とくに三京林道周辺では多くみられた。

島では最大の哺乳類であること、生息域が狭いことから多く目についたのかもしれない。

なお、山田川上流では、白骨化した雄1頭分の骨格を発見した。

徳之島のリュウキュウイノシシは保護に留意すべき地域個体群として環境庁編・「日本版レッドデータブック」(1991)に記載されている。



写真-14 リュウキュウイノシシ

○ ジャコウネズミ *Suncus murinus*

ネズミという名がついているがネズミの仲間ではなく、モグラと同じ食虫類である。

徳之島では民家地域で普通にみられる、土地の人はジャーユンとよぶ。(義)

雑食性で人間の食べる物なら何でも食べるという幅広い食性をもった動物で、南方から人間とともに分布を拡大してきたとされる。(鮫島、1995)

今回、伊仙町で採取した2個体の計測値は次のとおり

1995.8.11・頭胴長 12cm 尾長 6.5cm 耳長 0.9cm 乳頭3対 (体重 34.6g)

1995.11.14・頭胴長 11cm 尾長 5.9cm 耳長 0.7cm 乳頭3対

(5) まとめ

今回の調査で足跡、糞などフィールドサインで見つかったものや実物を確認した哺乳類は、アマミノクロウサギ、ケナガネズミ、アマミトゲネズミ、リュウキュウイノシシ、ジャコウネズミの5種であった。

このうち、アマミノクロウサギについては非常に少ないという印象をうけた。レッドデータブックの「絶滅危惧種」にランクアップして保護増殖を検討する必要があるのではないかとと思われる。

このほか、徳之島にはワタセジネズミ、コキクガシラコウモリ、アブラコウモリ、ハツカネズミ、クマネズミ、ドブネズミなどが生息している。(鮫島、1995)

※イタチは昭和30年頃、ハブ対策として移入されたが、現在は発見されていない。(義)

参考(引用)文献

- 阿部慎太郎・阿部優子. 1994. ケナガネズミ若齢個体の観察記録, チリモス 5 ①. 1-4
- 阿部優子・阿部慎太郎・中原貴久子. 1995. ケナガネズミの交尾行動の観察記録.
チリモス Vol6 (1) 1-6
- 伊仙町誌編纂委員会編. 1978. 伊仙町誌, 720pp.
- 今泉吉典. 1993. 日本人の起源 4 日本の哺乳動物, 60pp. 教育社. 東京
- 宇田川龍男・千石正一編集. 1985. 決定版生物大図鑑 動物, 431pp. 世界文化社. 東京
- 岡口要校閲. 今泉吉典著. 1960. 原色日本哺乳類図鑑, 274pp. 保育社. 大阪
- 小野木三郎. 1976. 歩いて眺めて考えて, 223pp. 教育出版文化協会. 岐阜
- 鹿児島県教育委員会. 1977. 特別天然記念物アマミノクロウサギの実態調査, 69pp.
- 勝 廣光. 1994. 雨の夜のケナガネズミ, チリモス 5 ①. 18-19
- 加藤陸奥雄・沼田真監修・上野俊一編著. 1993. 滅びゆく日本の動物50種, 194pp. 築地書館.
東京
- 子安和弘. 1993. 足跡図鑑, 178pp, 日経サイエンス社. 東京
- 鮫島正道. 1995. 東洋のガラパゴス. 177pp. 南日本新聞社, 鹿児島
- 鮫島正道. 1995. 徳之島の野生動物の現状と保護対策.
鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化26号. 117-128
- 酒匂 猛. 内村正之. 是枝吉則. 1991. アマミノクロウサギの飼育と繁殖. どうぶつと動物園 7月号.
30-32, 東京動物園協会
- 杉村 乾. 1994. 森林開発とアマミノクロウサギの保護問題. 関西自然保護機構会報. 16. ②.
117-121
- 杉村 乾・佐藤重穂・山田文雄. 1995. 徳之島におけるアマミノクロウサギの生息状況について.
チリモス 6 ①. 17-21
- 富田幸光・大塚裕之・上野輝彌・佐倉朔・馬場悠男. 1990. 徳之島・奄美大島における
古脊椎動物学的・古人類学的調査の概要, 国立科学博物館専報第23号別冊 173-181
- 松元光春. 1986. ヨヲキ洞穴出土の動物骨, 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6) 61-68
- 宮城邦治. 1985. 徳之島の動物相の概要. 沖縄国際大学南東文化研究所. 徳之島調査報告書,
91-99
- 安間繁樹. 1985. アニマル・ウォッチング, 271pp. 晶文社. 東京

(執筆 酒匂 猛・ 義 憲和)

5 徳之島の鳥類

徳之島は、鹿児島から南へ468kmの海上にあり、太平洋と東シナ海の境に島弧状に配列した南西諸島のほぼ中央部を占める奄美諸島の一属島である。面積 247km²、周囲約82kmの島で、主な山は、北部に天城岳(533m)、三方通岳(495m)が位置し、中央部から南部にかけて美名田山(437m)、井之川岳(644m)、剝岳(382m)、丹発山(443m)そして犬田布岳(417m)が山脈を成している。主な川は秋利神川(全長13km)、万田川(8 km)、亀徳川(8 km)、鹿浦川(8 km)があり、雨量が多いため水量は豊富である。地質は基盤が古生層で、それを貫く花崗岩があり、周縁部は第三紀のいわゆる琉球石灰岩で覆われている。

気候は亜熱帯性気候であり、年間平均気温は21.3℃(奄美大島20.0℃)の完全な無霜地帯であり、年間降水量は1621mm(奄美大島2609mm)である。高温多湿で亜熱帯的であるため植物の種類も多く南方系植物が多く見られる。植物の種類は奄美大島よりやや少ないが、高い山があるので多数の琉球要素を含んでいる。

徳之島を含む南西諸島は最も早くアジア大陸から分離した島々であり、生物地理学的・生物学的に最も注目すべき特殊地帯である。特に高山を持つ奄美大島とならび徳之島も貴重で珍しい(古種)生き物たちが多い。

鳥類は国の天然記念物に指定されたアカヒゲ・カラスバトがある。徳之島産の鳥類について環境庁編 レッドデータブック(日本の絶滅のおそれのある野生生物)の掲載種を見ると、絶滅危惧種(絶滅の危機に瀕している種または亜種)としてアマミヤマシギがある。危急種(絶滅の危険が増大している種または亜種)としてカラスバト・アカヒゲがあり、稀少種(存続基盤が脆弱な種または亜種)にはベニアジサシ・エリグロアジサシがある。

徳之島の鳥類に対する一般的な記述には鹿児島県(1975)(1987)、環境庁(1981)、清棲(1952)、小林(1976)、日本鳥学会(1974)、高野(1980)(1982)、迫(1968)、鮫島(1995)がある。文化財(天然記念物)に指定された鳥類ならびにレッドデータブック掲載種については文化庁(1975)、環境庁(1991)、鮫島(1993)がある。

本報告では徳之島の鳥相の概略について文献や資料を参考にし一部に著者の知見を加えた。今回、徳之島の森林性の鳥類相を知る目的で、三京地域においてロードサイドカウント法による定量調査も行った。

(1) 徳之島の鳥類相の概説

これまでに徳之島で記録された鳥、著者の確認により新たに加えた種を含め全種を目別に列記する。新たに加えた種はシロハラクイナ(1991.9.3, 天城町当部, 轢死体)、カワセミ(1992.9.1, 天城町三京水源池, 写真記録)、アマミヤマシギ(1991.9.1, 徳之島町港川, 1992.9.1, 天城町三京, 目撃)、キレンジャク(1991.1.26, 天城町三京, 目撃)である。また、文献ならびに資料にはルリカケスとオオトラツグミも記載されているが、これまで著者が十数年かけ10回の調査で確認出来なかったこと、環境庁編・レッドデータブック(日本の絶滅のおそれのある野生生物)でも除外されているため、本報告でも除外した。

ミズナギトドリ目(オオミズナギドリ) ペリカン目(ウミウ) コウノトリ目(リュウキュウヨシゴイ, ゴイサギ, ササゴイ, アマサギ, チュウサギ, コサギ, クロサギ, アオサギ, コウノ

トリ) ガンカモ目(カルガモ, コガモ, シマアジ, ハシビロガモ) ワシタカ目(ミサゴ, ハチクマ, ツミ, サシバ, チョウゲンボウ) ツル目(ミフウズラ, ナベヅル, リュウキュウヒクイナ, シロハラクイナ, バン) チドリ目(ミヤコドリ, コチドリ, シロチドリ, メダイチドリ, ムナグロ, ダイゼン, ケリ, キョウジョシギ, ウズラシギ, ハマシギ, オバシギ, ツルシギ, アオアシシギ, クサシギ, タカブシギ, キアシシギ, イソシギ, ダイシャクシギ, ホウロクシギ, チュウシャクシギ, ヤマシギ, アマミヤマシギ, タシギ, セイタカシギ, オオアジサシ, アジサシ, ベニアジサシ, エリグロアジサシ, セグロアジサシ, コアジサシ) ハト目(カラスバト, リュウキュウキジバト, ズアカアオバト) フクロウ目(リュウキュウコノハズク) アマツバメ目(ハリオアマツバメ, アマツバメ) ブッポウソウ目(リュウキュウアカショウビン, カワセミ, ヤツガシラ) キツツキ目(アマミコゲラ) スズメ目(ツバメ, リュウキュウツバメ, キセキレイ, ハクセキレイ, ムネアカタヒバリ, タヒバリ, リュウキュウサンショウクイ, アマミヒヨドリ, キレンジャク, モズ, アカヒゲ, ルリビタキ, ジョウビタキ, ノビタキ, イソヒヨドリ, クロツグミ, アカハラ, シロハラ, ツグミ, リュウキュウウグイス, セッカ, キビタキ, リュウキュウサンコウチョウ, アマミヤマガラ, アマミシジュウカラ, リュウキュウメジロ, ミヤマホオジロ, アオジ, スズメ, コムクドリ, リュウキュウハシブトガラス) 13目97種である。

しかし、今後、詳細な確認調査により、さらに多くの鳥種が確認されるものと思われる。

(2) 徳之島の留鳥ならびに繁殖鳥

徳之島本来の鳥として、留鳥と当地で繁殖する鳥にかぎり記述する。

- ① コウノトリ目 サギ科(リュウキュウヨシゴイ・クロサギ)
- ② ガンカモ目 ガンカモ科(カルガモ)
- ③ ツル目 ミフウズラ科(ミフウズラ) クイナ科(リュウキュウヒクイナ・バン)
- ④ シギ・チドリ目 シギ科(アマミヤマシギ) カモメ科(ベニアジサシ)
- ⑤ ハト目 ハト科(カラスバト, リュウキュウキジバト, リュウキュウズアカアオバト)
- ⑥ フクロウ目 フクロウ科(リュウキュウコノハズク)
- ⑦ ブッポウソウ目 カワセミ科(カワセミ, リュウキュウアカショウビン)
- ⑧ キツツキ目 キツツキ科(アマミコゲラ)
- ⑨ スズメ目 ツバメ科(リュウキュウツバメ) サンショウクイ科(リュウキュウサンショウクイ) ヒヨドリ科(アマミヒヨドリ) ヒタキ科(アカヒゲ, イソヒヨドリ, リュウキュウウグイス, セッカ, リュウキュウサンコウチョウ) シジュウカラ科(アマミヤマガラ, アマミシジュウカラ) メジロ科(リュウキュウメジロ) ハタオリドリ科(スズメ) カラス科(リュウキュウハシブトガラス)

(3) 徳之島天城町三京地域における鳥類の定量調査

徳之島の森林性の鳥類相を知る目的で、三京地域においてロードサイドカウント法による定量調査を行った。1991,1,26. (9:30~11:30) の冬季の調査(個人調査), 1995,8,11. (7:30~9:30) の夏季の調査(鹿児島県立博物館・鹿児島島の自然調査事業)を合わせてまとめた。

ロードサイドカウント法で観察された鳥類は表 1に示した。夏季は12種, 冬季は10種と両季節合わせて17種が確認された。分類ならびに学名は環境庁編・日本産野生生物目録(一本邦産野生動物の種の現状—脊椎動物編)に準じた。

<調査地域で今回確認できた鳥類>

チドリ目 CHARADRIIFORMES

シギ科 Scolopacidae

アマミヤマシギ *Scolopax mira* Hartert, 1916

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 Columbidae

リュウキュウキジバト *Streptopelia orientalis stimpsoni* (Stejneger, 1887)

リュウキュウズアカアオバト *Sphenurus formosae permagnus* (Stejneger, 1887)

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

カワセミ科 Alcedinidae

リュウキュウアカシヨウビン *Halcyon coromanda bangsi* (Oberholser, 1915)

カワセミ *Alcedo atthis bengalensis* Gmelin, 1788

キツツキ目 PICIFORMES

キツツキ科 Picidae

アマミコゲラ *Dendrocopos kizuki amamii* (Kuroda 1922)

スズメ目 PASSERIFORMES

セキレイ科 Motacillidae

キセキレイ *Motacilla cinerea robusta* (Brehm, 1857)

サンショウクイ科 Campephagidae

リュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae* Stejneger, 1887

ヒヨドリ科 Pycnonotidae

アマミヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis ogawae* Hartert, 1907

レンジャク科 Bombycillidae

キレンジャク *Bombycilla garrulus centralasiae* Poliakov, 1915

ヒタキ科 Muscicapidae

(ヅグミ亜科) アカヒゲ *Erithacus komadori komadori* (Temminck, 1835)

シロハラ *Turdus pallidus* Gmelin, 1789

(ウグイス亜科)

リュウキュウウグイス *Cettia diphone riukiensis* (Kuroda, 1925)

(カササギヒタキ亜科)

リュウキュウサンコウチヨウ *Terpsiphone atrocaudata illex* Bangs, 1901

シジュウカラ科 Paridae

アマミヤマガラ *Parus varius amamii* (Kuroda, 1922)

アマミシジュウカラ *Parus major amamiensis* Kleinschmidt, 1922

メジロ科 Zosteropidae

リュウキュウメジロ *Zosterops japonica loochoensis* Tristram, 1889

この中で国指定の天然記念物としてアカヒゲがある。環境庁編・レッドデータブック（日本の絶滅のおそれのある野生生物）掲載種にはアマミヤマシギが絶滅危惧種、アカヒゲは危急種として区分されている。

夏季はアマミヒヨドリが圧倒的に多く、次いでリュウキュウメジロ、リュウキュウサンコウチョウ、リュウキュウキジバト、アマミヤマガラと続く。冬季はアマミヒヨドリが圧倒的に多く、次いでアマミヤマガラ、リュウキュウメジロと続く。渡り鳥（冬鳥）のクレンジャクとシロハラが確認された。今回の調査は夏季1回、冬季1回の2回であり、短期間の調査のため確認できなかった種もあると思える。

一般に林層は林上空、林冠、中層、下層、地上などに分けられ、鳥類の種による環境選択が認められる。徳之島の森林での鳥類の林層分布状態は、主な種について述べると林上空・林冠にはリュウキュウサンショウクイの飛翔がみられ、中層にはリュウキュウズアカアオバト、リュウキュウアカショウビン、リュウキュウメジロ、アマミコゲラ、アマミシジウカラ、アマミヤマガラ、リュウキュウサンコウチョウが、下層にはリュウキュウウグイス、アカヒゲ、地上にはシロハラ、リュウキュウキジバト、アマミヤマシギ、キセキレイが観察された。

徳之島の森林性鳥類相と奄美大島の森林性鳥類相を比較してみると、優占種はほぼ一致する。奄美大島では優占度の高いリュウキュウハシブトガラスが徳之島では1羽も確認されなかったことが特徴と思える。

徳之島の森林性鳥類相はアマミヒヨドリが全面的に多く優占種をなし、これにリュウキュウメジロ、アマミヤマガラの3種で総個体数の60%を占めた。このように数種の鳥が優占種となるのは、とくに各地の島嶼の鳥相に共通な現象である。

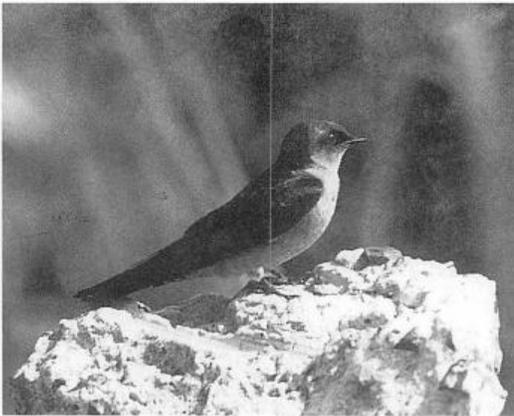


写真-1 リュウキュウツバメ

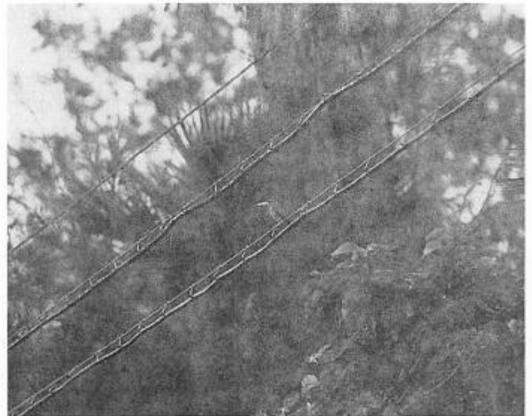


写真-2 リュウキュウアカショウビン



写真-3 リュウキュウコノハズク



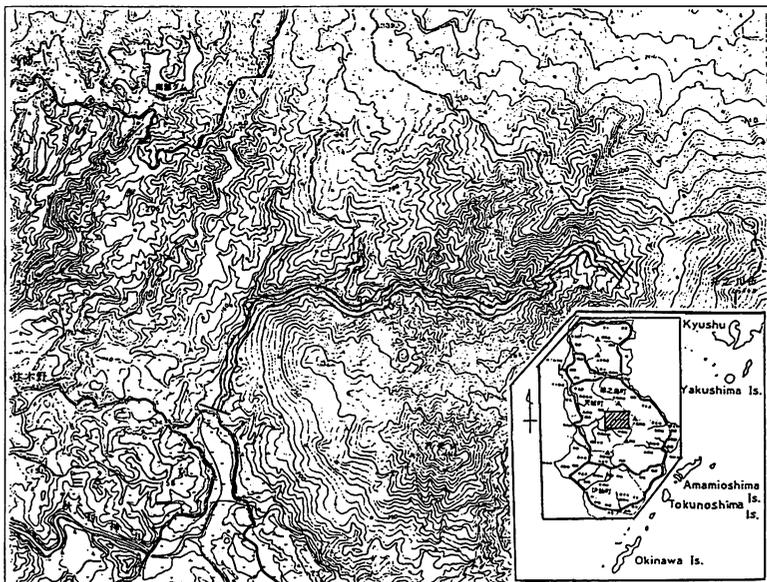
写真-4 リュウキュウキジバト

表1 ロードサイドカウント法により確認された調査地域の鳥類

| 種名 | 観 察 時 間 | | | | 総 個 体 数 | 平 均 優 占 度 |
|---------------|----------------|---------|----------------|---------|------------|-----------|
| | '95.8/11(7:30) | | '91.1/26(9:30) | | | |
| | 個体数 | 優占度 | 個体数 | 優占度 | | |
| アマミヒヨドリ | 23 | (23.96) | 24 | (29.63) | 47 | (26.55) |
| リュウキュウメジロ | 19 | (19.79) | 14 | (17.28) | 33 | (18.64) |
| アマミヤマガラ | 9 | (9.37) | 21 | (25.93) | 30 | (16.95) |
| リュウキュウサンコウチョウ | 14 | (14.58) | 0 | — | 14 | (7.91) |
| リュウキュウキジバト | 10 | (10.42) | 0 | — | 10 | (5.65) |
| リュウキュウウグイス | 0 | — | 6 | (7.41) | 6 | (3.39) |
| リュウキュウズアカアオバト | 4 | (4.17) | 2 | (2.47) | 6 | (3.39) |
| アマミコゲラ | 0 | — | 5 | (6.17) | 5 | (2.82) |
| ※アカヒゲ | 4 | (4.17) | 1 | (1.23) | 5 | (2.82) |
| リュウキュウアカショウビン | 5 | (5.21) | 0 | — | 5 | (2.82) |
| アマミシジュウカラ | 4 | (4.17) | 0 | — | 4 | (2.26) |
| シロハラ | 0 | — | 4 | (4.94) | 4 | (2.26) |
| キレンジャク | 0 | — | 3 | (3.70) | 3 | (1.69) |
| *アマミヤマシギ | 2 | (2.08) | 0 | — | 2 | (1.13) |
| リュウキュウサンショウクイ | 1 | (1.04) | 0 | — | 1 | (0.56) |
| カワセミ | 1 | (1.04) | 0 | — | 1 | (0.56) |
| キセキレイ | 0 | — | 1 | (1.23) | 1 | (0.56) |
| 総種類数(17) | 96個体(12種) | | 81個体(10種) | | 177個体(17種) | |

※：国指定の天然記念物・レッドデータブック掲載種

*：レッドデータブック掲載種



図一 徳之島三京における鳥類観察地域

参考（引用）文献

- 文化庁. 1975. 天然記念物緊急調査植物図・主要動物地図, 143. 鹿児島県. 国土地理協会. 東京
- 鹿児島県. 1975. 鹿児島の野鳥. 鹿児島県環境局環境保全課
- 鹿児島県. 1987. 鹿児島県の野鳥. 鹿児島県保健環境部環境管理課
- 環境庁. 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局. 東京
- 環境庁. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 日本野生生物研究センター. 東京
- 環境庁. 1993. 日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—. 自然環境研究センター. 東京
- 清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ. 講談社. 東京
- 小林桂助. 1976. 原色日本鳥類図鑑. 保育社. 大阪
- 黒田長久. 1967. 鳥類の研究—生態—. 新思潮社. 東京
- 黒田長久. 1979. 動物地理学. 共立出版株式会社. 東京
- 松田道生. 1985. 野鳥の調査—バードカウント入門. 東洋館出版社. 東京
- 森岡弘之・中村登流・樋口広芳. 1984. 現代の鳥類学. 朝倉書店. 東京
- 日本鳥学会. 1974. 日本鳥類目録. 学習研究社. 東京
- 日本鳥類保護連盟. 1965. 野外観察用鳥類図鑑. 凸版印刷. 東京
- 岡本久人・市田則孝. 野鳥調査マニュアル—定量調査の考え方と進め方. 東洋館出版社. 東京
- 迫 静男. 1968. 奄美大島の鳥類—海中公園センター調査報告. 鹿児島県海中公園学術調査報告 139—151
- 鮫島正道. 1985. 徳之島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第17号. 115—143
- 鮫島正道. 1992. 奄美大島の鳥類. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第21号. 71—84
- 鮫島正道. 1992. 奄美大島における森林性鳥類相に関する研究. 鹿児島県自然愛護協会. 自然愛護. 18. 4—7
- 鮫島正道. 1993. 徳之島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第26号. 117—128
- 鮫島正道. 1995. 東洋のガラパゴス. 南日本新聞社. 鹿児島
- 高野伸二. 1980. 野鳥識別ハンドブック. 日本野鳥の会. 東京
- 高野伸二. 1982. フィールドガイド—日本の野鳥. 日本野鳥の会. 東京

(執筆者 鮫島 正道・義 憲和)

6 徳之島の両生類・爬虫類

徳之島は、鹿児島から南へ468kmの海上にあり、太平洋と東シナ海の境に島弧状に配列した南西諸島のほぼ中央部を占める奄美諸島の一属島である。面積247km²、周囲約82kmの島で、主な山は、北部に天城岳(533m)、三方通岳(495m)が位置し、中央部から南部にかけて美名田山(437m)、井之川岳(644m)、剝岳(382m)、丹発山(443m)そして犬田布岳(417m)が山脈を成している。主な川は秋利神川(全長13km)、万田川(8km)、亀徳川(8km)、鹿浦川(8km)があり、雨量が多いため水量は豊富である。地質は基盤が古生層で、それを貫く花崗岩があり、周縁部は第三紀のいわゆる琉球石灰岩で覆われている。

気候は亜熱帯性気候であり、年間平均気温は21.3℃(奄美大島20.0℃)の完全な無霜地帯であり、年間降水量は1621mm(奄美大島2609mm)である。高温多湿で亜熱帯的であるため植物の種類も多く南方系植物が多く見られる。植物の種類は奄美大島よりやや少ないが、高い山があるので多数の琉球要素を含んでいる。

徳之島を含む南西諸島は最も早くアジア大陸から分離した島々であり、生物地理学的・生物学的に最も注目すべき特殊地帯である。特に高山を持つ奄美大島とならび徳之島も貴重で珍しい(古種)生き物たちが多くいる。徳之島は奄美大島や沖縄島と似た環境のため、生息している動物も当然同じような種が生息しているといえる。しかし、詳しく見れば島によってある程度の違いがあることがわかる。

徳之島の両生・爬虫類に対する一般的な記述には前田・松井(1989)、中村・上野(1963)、鮫島(1995)、千石(1979)がある。研究報告には木場(1956)・(1958)・(1959)・(1959)、大嶺(1987)・(1987)、鮫島(1985)がある。レッドデータブック掲載種については環境庁(1981)、(1991)、鮫島(1993)がある。

本報告では徳之島の両生類・爬虫類の概略について文献や資料を参考にし一部に著者の知見を加えた。今回、特に重要種のイボイモリとオビトカゲモドキについては生息地での生態調査を行った。

(1) 徳之島の両生類・爬虫類の概説

これまでに徳之島で記録された両生類・爬虫類の全種を目別に列記する。また、一部の文献ならびに資料にはイシカワガエルも記載されているものもあるが、著者が十数年かけ10回の調査で確認出来なかったこと、ハナサキガエルの緑色型の誤認による記載と思われるため、本報告では除外した。また、シリケンイモリの生息も一部の文献ではみられるが、現在は確認できないのでここでは除外した。分類ならびに学名は環境庁編：日本産野生生物目録(一本邦産野生動植物の種の現状一、脊椎動物編)に準じた。

<徳之島産の両生類・爬虫類>

両生綱 AMPHIBIA

サンショウウオ目 CAUDATA

イモリ科 Salamandridae

イボイモリ *Tylostotriton andersoni* (Boulenger, 1892)

カエル目 SALIENTIA

アマガエル科 Hylidae

- ハロウエルアマガエル *Hyla hallowellii* Thompson, 1912
 アカガエル科 Ranidae
 リュウキュウアカガエル *Rana okinavana* Boettger, 1895
 ウシガエル (移入種) *Rana catesbeiana* Shaw, 1802
 ヌマガエル *Rana limnocharis* Wiegmann, 1835
 ハナサキガエル *Rana narina* Stejneger, 1901
 アオガエル科 Rhacophoridae
 リュウキュウカジカガエル *Buergeria japonica* (Hallowell, 1860)
 アマミアオガエル *Rhacophorus viridis amamiensis* Inger, 1947
 ジムグリガエル科 Brevicipitidae
 ヒメアマガエル *Microhyla ornata* (Dumeril et Bibron, 1841)

爬虫綱 REPTILIA

トカゲ目 SQUAMATA

(トカゲ亜目)

ヤモリ科 Gekkonidae

- ヤモリ *Gekko japonicus* (Dumeril et Bibron, 1836)
 ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* Dumeril et Bibron, 1836
 タシロヤモリ *Hemidactylus bowringii* (Gray, 1845)
 オビトカゲモドキ *Eublepharis kuroiwae splendens* Nakamura et Ueno, 1959

キノボリトカゲ科 Agamidae

- キノボリトカゲ *Japalura polygonata polygonata* (Hallowell, 1860)

トカゲ科 Scincidae

- ヘリグロヒメトカゲ *Ateuchosaurus pellopleurus* (Hallowell, 1860)
 バーバートカゲ *Eumeces barbouri* Van Denburgh, 1912
 オオシマトカゲ *Eumeces marginatus oshimensis* Thompson, 1912

カナヘビ科 Lacertidae

- アオカナヘビ *Takydromus smaragdinus* Boulenger, 1887

(ヘビ亜目)

メクラヘビ科 Typhlopidae

- メクラヘビ *Ramphotyphlops braminus* (Daudin, 1803)

ヘビ科 Colubridae

- リュウキュウアオヘビ *Opheodrys semicarinatus* (Hallowell, 1860)
 アカタ *Dinodon semicarinatus* (Cope, 1860)
 ガラスヒバア *Natrix pryeri pryeri* (Boulenger, 1887)

コブラ科 Elapidae

- ハイ *Calliophis japonicus boettgeri* Feitze, 1894

クサリヘビ科 Viperidae

- ヒメハブ *Trimeresurus okinavensis* Boulenger, 1892
 ハブ *Trimeresurus flavoviridis flavoviridis* (Hallowell, 1860)

以上、徳之島の両生類(綱)は 2目4科9種、爬虫類(綱)は 1目9科16種である。この中の一部(ヌマガエル, ウシガエル, ヤモリ, メクラヘビ)以外は南西諸島特有の固有種ならびに固有亜種であり、興味深い動物である。

徳之島に生息する両生類・爬虫類の中には国の天然記念物に指定されたものは無いが、学術的に貴重な種が多い。徳之島産の両生類・爬虫類について環境庁編 レッドデータブック(日本の絶滅のおそれのある野生生物)の掲載種を見ると、稀少種(存続基盤が脆弱な種または亜種)にはイボイモリ, クロイトカゲモドキの亜種オビトカゲモドキ, ヒヤンの亜種ハイがある。

徳之島産の両生類相の特徴は、奄美大島とほぼ同じように見えるが、部分的にはある程度の差がみられる。奄美大島に生息して徳之島にいない両生類としてオットンガエルである。イシカワガエルの生息については、文献上ではややあいまいなところがある。地元の人に協力をもらい現在調査しているが、イシカワガエルとして持ち込まれるカエルは体色が緑色の強いハナサキガエルであり、今後とも調査を継続する必要がある。本報告では一応除外してある。イモリの仲間のシリケンイモリは、文献によっては徳之島にも分布すると記載しているものもあるが、実際には現在は生息していないようである。一方、イボイモリは奄美大島に比べ生息数は多い。

徳之島産の爬虫類相の特徴は、奄美大島とほぼ同じように見えるが、部分的な差が見られる。鳴くヤモリのホオグロヤモリは徳之島が北限で奄美大島には生息しない。また、徳之島だけ生息しているオビトカゲモドキはクロイトカゲモドキの亜種であり、同じ仲間は沖縄本島にクロイトカゲモドキ, 渡嘉敷島・渡名喜島・久米島に亜種マダラトカゲモドキがいる。いずれも石灰岩地域や山地の森林・石灰洞などに生息している。ヒヤンはコブラ科で体色の美しい小型の毒蛇であり、奄美大島とその属島にだけ見られるが、徳之島には模様が完全に違うヒヤンの亜種ハイが生息している。このハイは徳之島のほかに沖縄本島や久米島にも見られる。

(2) 重要種の生息状況と生態調査

徳之島の両生類・爬虫類の中で特に重要種のイボイモリ, オビトカゲモドキそしてハイについて、生息地での生態調査を行った。

① イボイモリの生息状況と現状

イボイモリは奄美大島・徳之島・沖縄本島・渡嘉敷島に分布する遺存種で、個体数は少ない。奄美諸島では奄美大島と徳之島に生息しており、奄美大島に比べ徳之島は本種の生息数は多い。

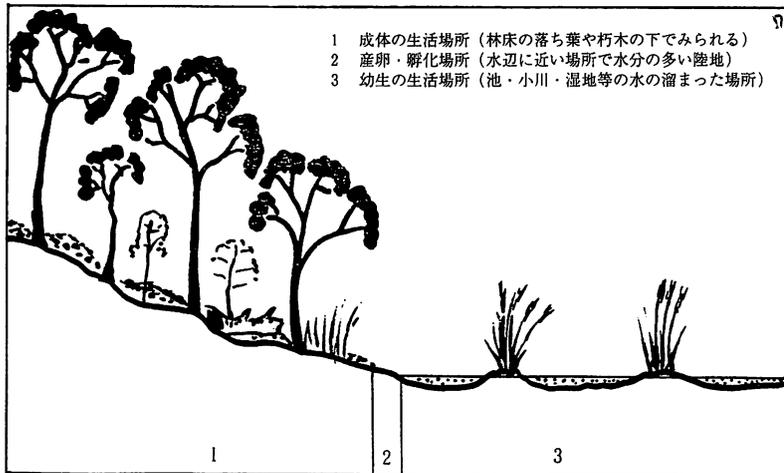
奄美大島には同じイモリの仲間でシリケンイモリが生息し、イボイモリの生息域と完全に重複している。更に、シリケンイモリは奄美大島産の両生類の中でも数の多いほうであり、しかも食欲は旺盛で、カエルの卵などをパクパク食べている姿をよくみかける、おそらく、イボイモリの卵も被害にあっている事と思う。しかし、徳之島にはシリケンイモリは生息していないためその点では心配ない。このことが徳之島でのイボイモリの存続に貢献しているものと思われる。

徳之島の森林内の広範囲にわたり生息地があり、また、シイやカシの原生林の林縁部の湧水地の周辺のみかけ、春から夏にかけて水たまり等ではイボイモリの幼生がみられる。しかし、近年、国営農地開発や県営畑総事業など開発が進み、急激に生息地が消滅しつつある。

数カ所の生息地の共通した環境を模式図に示してみた。正確な場所の記載は、本種の乱獲防止の意味からもこの報告からはずした。

生息環境は水溜もしくは沢等の水際から数メートルから数十メートルの範囲で、昼間、成体は薄暗い林内で朽ち木や落ち葉の堆積した下部にもぐり込むようにして潜んでいる。ある程度の湿度はあると思えるが、じめじめしている環境でない。シリケンイモリと違い水とは完全に離れた環境である。生息環境の模式図を図1に示した。

飼育下ならびに生息地での産卵状況はほぼ共通しているため、ここでは著者らの飼育下繁殖の成功例（1992年）からの経時的なデータを記述する。水面から数センチから数十センチの湿りけのあるじめじめした陸地に一粒、一粒を散布するように産みつける。産卵された卵の径は約3～4mmでそれを径8mmゼリー層が包むようになっている。ゼリー状の物質が卵を保護し乾燥を防ぐものと思われる。このゼリー層と地面との接触部で水分の吸収が行われて大きくなり乾燥を調節しているのであろう。産卵から13～18日で孵化し、孵化した幼生は、陸に上げた魚がピチピチ跳ねると同じような動きで、水辺にたどりつき水中に入る。変態するまで水中で過ごし、孵化後約40日で陸地上陸し変態した。幼生の餌は乾燥赤虫を与えた。変態後は水に入ることはほとんど無い。体型や皮膚の状況は爬虫類に近く、両生類と爬虫類の中間型の生態を示している。卵の形状が水辺を必要とし、爬虫類のように殻を持った卵まで進化していないが、陸地に産卵する事は興味深い。



図一 1 イボイモリの生息環境の模式図



図一 2 オビトカゲモドキの生息環境模式図

② オビトカゲモドキの生息状況と現状

オビトカゲモドキはクロイワトカゲモドキの一亜種で、徳之島にだけ生息する固有亜種である。石灰岩地域や山地の森林・石灰洞などに生息し、個体数は少ない。外形は赤紫の毒々しい模様で赤い目玉をしており、有毒生物の代表格のように見える。実際に地元の人にはジーハブ(小さいハブ)と呼びこの生き物を怖がっている。しかし、最近ではペットとして高額で売れることもあり相当数の個体が東京のペット商に持ち出されているのが現状である。同じ仲間のクロイワトカゲモドキ・マダラトカゲモドキは沖縄県の天然記念物に指定されているため、保護策のとられていない鹿児島県徳之島のオビトカゲモドキが出回ることになる。何らかの保護策をこうしなければ、近い将来、オビトカゲモドキという一つの種が絶滅することになる。正確な場所の記載は、本種の乱獲防止の意味からもこの報告からはずした。

生息地の環境はまちまちで、森林内・沢・林道から住宅地の下駄箱や風呂のかまど内でもみつかることがあり、偏在型で相対的密度はやや高いと言える。本種は逃げ込める穴の多い場所があれば、あまり環境を選ばない種と言っていい。生息環境の模式図を図2に示した。行動型は夜行性で、昼間は暗い場所に潜んでいるが、夜間、隠れ場から這いだし、林床で餌をあさる姿を観察できる。動きが素早くすぐに穴に逃げ込むため捕獲はなかなか難しい。

③ ハイの生息状況と生態

ハイは奄美大島に生息するヒヤンの亜種でコブラ科で体色の美しい小型の毒蛇である。ハイは徳之島のほかに沖縄本島や久米島にも見られる。奄美大島とその属島にだけ見られるヒヤンは、模様が完全に違うが形態は同じである。

ハイやヒヤンの毒成分はハブ毒とは別で中枢神経に作用する猛毒をもっている。しかし、土地の人はこのヘビを恐れて触らないため被害報告はない。捕らえられると円錐状に尖った尾端を的に押しつけて威嚇する動作をする。現在でも土地の人は尾に猛毒針を持っていると信じており、噛まれる事より刺されることを恐れるが、実際には毒針などは無い。

1983年9月2日の昼間、天城町三京の林道に転がった直径10センチたらずの石の下で一個体確認し採集したことがある、その後確認例はなく個体数は極めて少ないと思える。

ハイの模様には幾つかのタイプがあり、前記の採集個体と伊仙町立歴史民俗博物館の標本の計5個体を検索し、図のような3タイプに別れた。内1個体がAタイプ(3本の縦条をもつ)、1個体がBタイプ(5本の縦条をもつをもつが、左右の条が狭い幅で2分する)、3個体がCタイプ(5本の縦条をもつをもつが、左右の条が広い幅で2分する)であった。

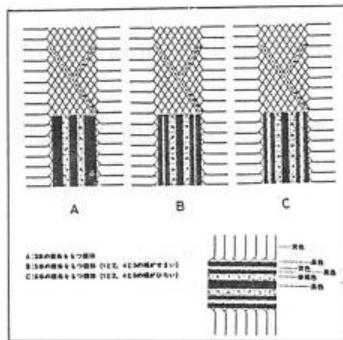
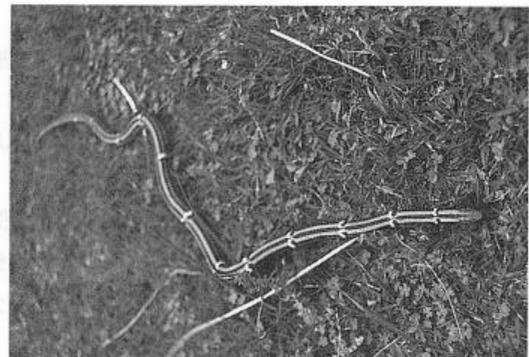
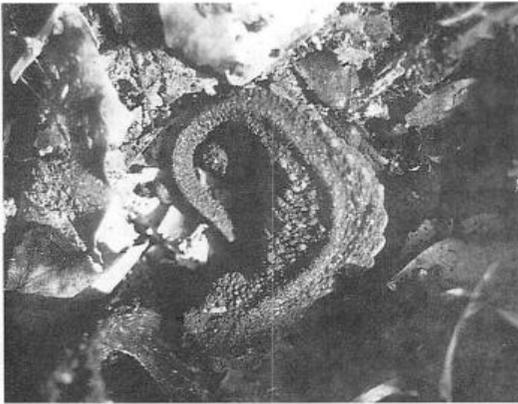


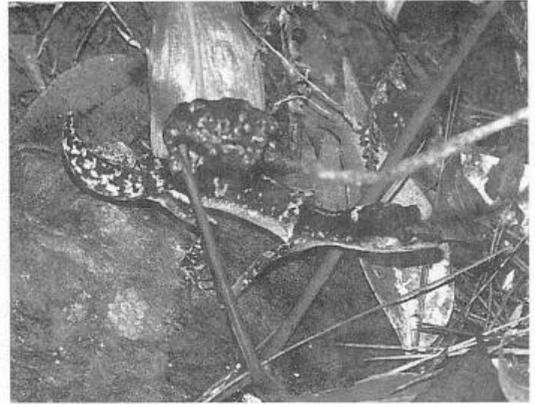
図-3 ハイの斑紋の個体変異



ハ イ



イボイモリ



オビトカゲモドキ

参考(引用)文献

- 環境庁. 1981. 日本の重要な両生類・爬虫類—南九州・沖縄版. 大蔵省印刷局. 東京
- 環境庁. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 日本野生生物研究センター. 東京
- 環境庁. 1993. 日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—, 脊椎動物編. 自然環境研究センター. 東京
- 木場一夫. 1956. 奄美群島の爬虫・両生相 (I). 熊本大学教育学部紀要, 4. 147—164
- 木場一夫. 1958. 奄美群島の爬虫・両生相 (II). 熊本大学教育学部紀要, 6. 178—185
- 木場一夫. 1959. 奄美群島の爬虫・両生相 (III). 熊本大学教育学部紀要, 7. 187—202
- 木場一夫. 1959. 奄美群島の爬虫・両生相 (IV). 熊本大学教育学部紀要, 8. 181—191
- 前田憲男・松井正文. 1989. 日本のカエル図鑑. 共立出版株式会社. 東京
- 中村健児・上野俊一. 1963. 原色日本両生爬虫類図鑑. 保育社. 大阪
- 大嶺哲雄. 1987. 琉球列島の動物分布特性と遺存種(1). 遺伝. 41巻 7号. 78—83
- 大嶺哲雄. 1987. 琉球列島の動物分布特性と遺存種(2). 遺伝. 41巻 8号. 55—59
- 鮫島正道. 1985. 徳之島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第17号. 115—143
- 鮫島正道. 1986. 奄美大島の動物. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第23号. 101—114
- 鮫島正道. 1992. 奄美大島の両生類・爬虫類. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第19号. 55—75
- 鮫島正道. 1993. 徳之島の野生動物の現状と保護対策. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所, 南日本文化, 第26号. 117—128
- 鮫島正道. 1995. 東洋のガラパゴス. 南日本新聞社. 鹿児島
- 鮫島正道・椎原春一. (投稿中) イボイモリの飼育下繁殖. 動物園水族館雑誌.
- 千石正一. 1979. 原色両生・爬虫類. 家の光協会. 東京

(執筆者 鮫島 正道・義 憲和)